

四旬節第四主日

2017. 3. 26

ヨハネ 9・1, 6-9, 13-17, 34-38

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高

今日の福音は、ヨハネ福音書9章に語られている、イエスによって光の中に立たせていただいた一人の人の物語です。

通りすがりに、道端に座って物乞いをしている、生まれながらに目の見えない人の前で足を止めた弟子は、「先生、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」と尋ねます。ずいぶん無神経で、ぶしつけな質問だと思いますが、反省してみると、わたしたちもこれほどまでにあからさまにではなくとも、あの時弟子たちの心に浮かんだような思いを持つことがあります。その人のことを気の毒に思いながらも、そのような人に対する自分たちの差別意識に気づかないままにすることがあります。そのような思いがあるから、わたしたちも思わず、あの時の弟子たちのような言葉を平気で口にしているのです。

しかし、イエスはこのような問いに対して毅然と宣言されます。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」。そのように言われて、イエスはあの人の目を開いてくださったのです。

自分についてこのように言われた時、今日の福音に語られているこの人は、見えないその目を見開いて、そのようなことを言うてくださるその方に向けたにちがいありません。自分にこのようなことを言うてくれた人に今まで遭ったことがなかったからです。だから彼は、自分の目に触れて泥を塗ってくれたその人の言うままにシロアムの池まで行って、目を洗ったのです。彼の目にはイエスが唾でこねた泥の生暖かい感触が残っていたことでしょう。このようにして、イエスが言われた神の業が彼の上に起こったのです。生まれてこの方一度も光を感じる事がなかった目が見えるようになっただけではありません。自分を光の世界に連れ出してくれたその方の名を彼は忘れることはできなかったのです。

この四旬節、復活祭を前にして、わたしたちも今日の福音に語られているこの人のように、言わば皮膚感覚をもってイエスの現存を感じ取りたいと思います。このミサの中でイエスの御からだをこの舌で味わい、イエスの足元に身を投げ出して、イエスがこの身に表してくださった神の業を讃えてとめどない感謝の言葉を口にしたいと思います。そのためにイエスは今日もわたしたちの前で足を止めてくださっているのです。